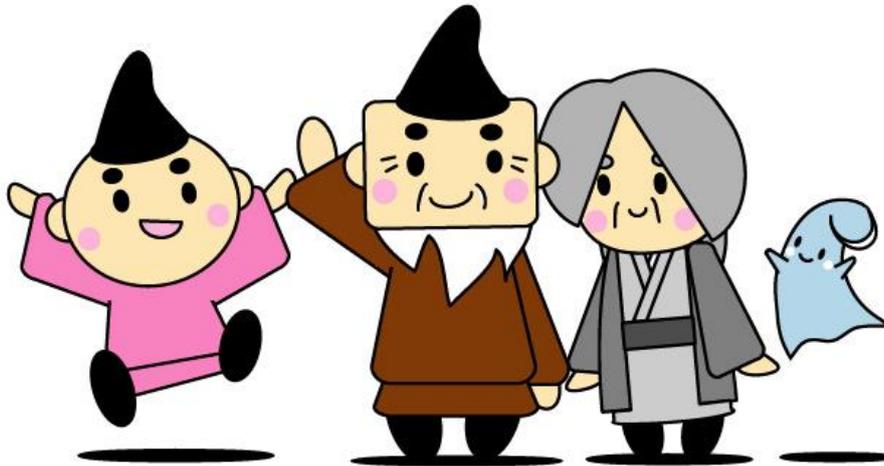


第3章 地域包括ケアシステムが目指すもの

「地域包括ケアシステム」が目指しているのは、「重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供される仕組み」です。



高齢者は「患者」である前に、自立して生活を営むひとりの「生活者」であり、一時的に「患者」として医療機関を利用しているにすぎません。医療機関にやってくる人の疾患を治療することが重要なのは言うまでもありませんが、目の前の人を「患者」としてだけではなく「生活者」として捉えて、より良い暮らしができるよう働きかけることが求められます。

そして、残念ながら医療や介護が必要になった時には、一人ひとりの希望に合った支援を受け、できるだけ自宅や地域で皆が支え合って暮らせるようにする仕組みが必要です。限られた医療・介護資源で多くの高齢者を支えていくにも、やはり様々な施設とそこで働く専門職が協力し合わなければなりません。医療・介護に関わるどの施設、どの職種も、独力で高齢者の生活を支えることはできませんから、医療関係者をはじめ、介護従事者や行政職員、地域の住民等、様々な関係者が互いに連携し、ネットワークを構築していくことが重要になります。これが地域包括ケアシステムの基本的な考え方です。

その際には、本人や家族がどのような選択をし、「実際の生活」「老い」「死」についてどのような心構えを持っているか、というところを全体のベースとしてとらえる必要があります。

<出典元：地域包括ケアと多職種連携（日本医師会）>